

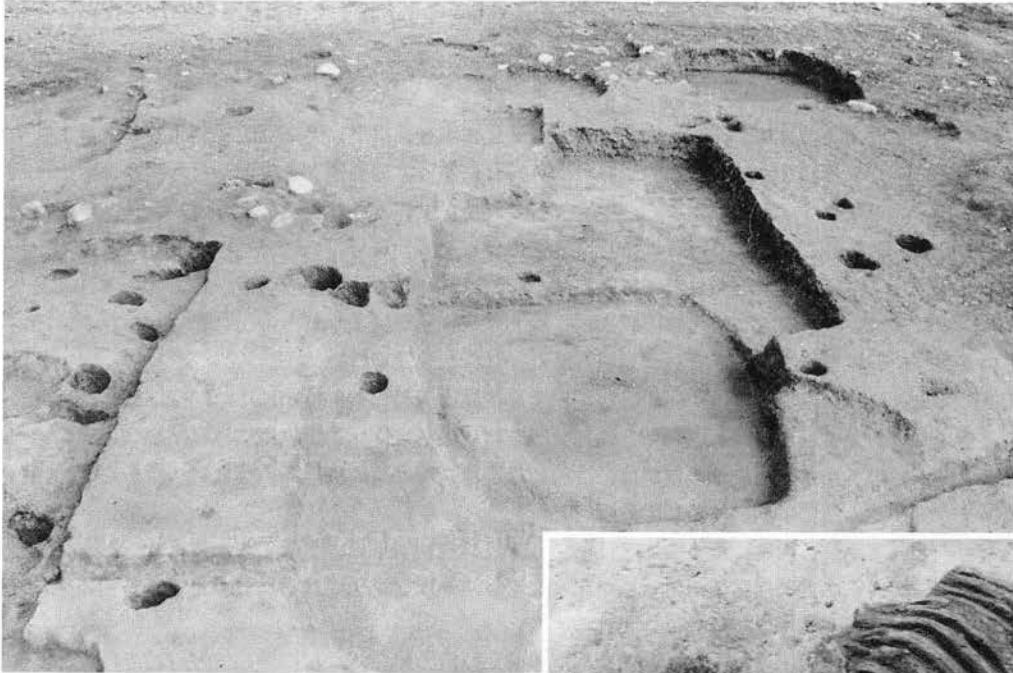
# 長野県埋蔵文化財二一

No. 11

1984. 12. 10

(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩筑調査事務所  
〒399-07 塩尻市広丘高出1977  
TEL 0263-54-2150



## 鑄師屋遺跡群 野火付遺跡

一御代田町御代田一

写真上 小竪穴状遺構 (中世)

写真下 埋葬馬 (平安時代)

御代田町教育委員会 堤 隆



鑄師屋遺跡群野火付遺跡は、中仙道小田井宿の西方を南流する濁川の西岸に位置し、標高760mを測る。

本遺跡は、昭和59年度県営圃場整備事業に伴い、御代田町教育委員会が主体となって本年5月より約4か月間発掘調査がなされた。15000㎡におよぶ調査地区からは、奈良時代の住居址8軒、平安時代の住居址8軒、時期不明の住居址2軒、平安時代と考えられる埋葬馬の土壙墓5基、中世の土壙230基・小竪穴状遺構64基・溝状遺構28基・掘立柱建物址8連・井戸址3基が検出された。

検出された遺構群のなかでも特に注意されるのは、5基の埋葬馬の土壙墓であろう(写真)。埋葬馬の土壙

墓の掘込面からは、平安時代の須恵器8点が供献されているような状態で出土した。馬は死後切断されることなくそのままの状態では埋葬されたものと考えられる。その年齢は10歳前後のものが主であるが、一頭は30歳を越える老齢馬である。これらの馬は、解剖学的見地からは古代馬かどうかの判断は難しいようであるが、その体高から比較的小型の馬であることが推察できる。古代御牧である塩野牧が律令官道の長倉駅家址を考えると貴重な資料と言えよう。

なお、中世の小竪穴状遺構群も充実した資料である。その性格の解明が今後の課題となろう。

## 発掘調査紹介

### 一県内各地の調査状況一

#### 根羽村信玄塚遺跡・信玄塚

佐藤 甞 信

信玄塚遺跡は下伊那郡根羽村横畑に所在する。今年度の発掘調査は、国道153号線改良工事に伴い、根羽村教育委員会が6月1日から7月13日までの34日間にわたって実施した。

遺跡は、1000m級の山間を南流する小川川に東面し、南は小川川の支流堂之入川によって区切られる、標高715～718mの傾斜地に立地している。遺跡北の山麓小台地上にある信玄塚（根羽村指定史跡）を含む全調査面積は、1900m<sup>2</sup>である。

調査の結果、縄文時代の住居址16軒・土壙13基と性格不明の大竪穴1基が検出された。住居址の内訳は、早期末葉1、後・晩期15である。早期の住居址では炉址が確認されたものの、プランを明確に把握することはできなかった。いっぽう後・晩期の住居址は、後期中葉に比定される円形プランの2軒を除き、他はいずれも隅丸方形を呈していた。遺物は、それぞれの住居址を中心に、縄文早期末葉・後期中葉加曾利B式・同末葉寺津下層式・晩期中葉（関西系）の土器、および打製石斧・横刃形石斧等が出土した。石器に使われている石材は、遺跡周辺で産出される玄武岩であり、天竜川沿岸に多い硬砂岩凝灰岩ではない。この辺に、地域性がみられ興味深い。



遺跡全景

武田信玄の墓との伝承がある信玄塚には、のちに現在の国道上に移されている宝篋印塔が、江戸時代中頃まで建っていた。今回の調査では、その跡に墓壙が検出された。規模は、確認面で径170cm、壙底で径85cm、深さ200cmである。副葬品等の出土はなく、被葬者を特定することもできないが、宝篋印塔との関連を考慮する必要があろう。

#### 飯山市長者清水遺跡

飯山市教育委員会 望月 静雄

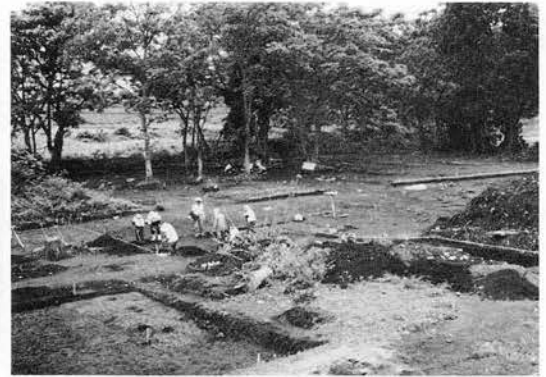
長者清水遺跡は、飯山市大字一山温井地区に所在する。

県営圃場整備事業に伴い、昭和59年6月2日より7月17日にかけて発掘調査を実施した。調査は飯山市教育委員会が主体となり、遺跡調査団（団長高橋桂氏）を編成して行われた。

この遺跡は古くから長者の屋敷跡と伝承されており、故北条耕作氏等により若干の土師器片が採集されていた。

発掘調査面積は約2000m<sup>2</sup>、検出された主な遺構は、平安時代住居址1、中世一掘立柱建築址3以上、土壙約10、濠、溝状遺溝、柵列、柱穴群多数一が検出された。

平安時代住居址は、420×470cmのほぼ方形を呈しており、三か所の焼土を多量に含むピットが検出された。



遺跡調査風景

さらに、覆土には多量の炭化物を含み、床面には炭化材が出土している。遺物は土師器坏形土器、灰釉陶器、鎌先状鉄製品等出土している。なお土師器坏形土器には「土」と墨書された例も存在する。

中世の遺構は、平安時代住居址出土地点より若干離れており、推定50mの方形に濠がめぐらされた内側より検出された。遺物は、土師器灯明皿、天目茶碗、珠州系壺、青磁等の土器、磁器類が出土し、その主体は15、16世紀に位置付けられるものである。その他、輸入銭貨が22枚出土した。最も古いものは1008年の祥符通

宝であり、新しいものは宣徳通宝（1426～1435年）である。また、刀子、釘等の鉄製品類、硯、砥石、石臼などの石製品が出土している。

本遺跡は、古代交通路の十日町道の一角に位置し、ほぼこの付近を頂点として千曲川の狭谷へ降りてゆく。また、室町時代に上杉謙信が越後と信濃を結ぶ道として重要視していたとされる関田峠の麓に存在することも、この遺跡の性格を考える上で注目すべき事象である。

## 浅科村矢嶋城跡

矢嶋城跡発掘調査団主任 上代 純一

立地……蓼科山麓北東小丘陵（舌状台地）上にあり、城跡の北東方は広々とした水田が広がり、西方は布施谷の東側丘陵が続き、南方は東蓼科山麓、東方は大池、水田を経て千曲川へと続く展望の良い場所に占地している。

歴史……「郡誌」に……伝木曾義仲の配下、矢島四郎行忠（源平盛衰記）やしまの次郎（承久記）の名が見える。

また、諏訪御符礼之古書には次の名が見られる。

文安5年	花会	矢島郷	矢島栄春
康正元年	五月会	矢島郷	大井政光
寛正3年	五月会	矢島郷	矢島光友
応仁2年	五月会	矢島郷	矢島光友
応仁3年	五月会	矢島郷	矢島光友
文明5年	花会	矢島郷	矢島光友
文明17年	五月会	矢島郷	矢島道慶
延徳元年	五月会	矢島郷	大井光友

これによると矢島郷は、大井氏の支配を受けていたとも考えられるが、矢島氏が当時の経営の中心であったことはまちがいないであろう。



遺跡全景

遺構……前述の如く、占地は展望の良い蓼科山麓の舌状台地を利用し正面は北方小諸方面を望んでいる。城の形態は輪郭式の城郭で主郭部を中心に曲輪を廻らしている。東方にある天徳城は、その支城というよりも近世的に言えば出丸程度のものであり、城の東側の谷に敵が進入するのを防ぐためのものと考えられる。

また、西側にも曲輪があるが急崖をなしており、調査区域外で調査を行わなかったが、何らかの施設があったのではないかと考える。

発掘はトレンチ8本、約750m<sup>2</sup>を掘り、遺構の検出は主郭北側に空堀1、柱穴57、土塹3、溝1が確認された。

遺構の性格は、全面調査をしていないので推定になるが、空堀は主郭部の守備強化、柱穴は建築物、土塹・溝は用途不明であるが現状からは水利と考える。

また、遺構のほかに特に注目する部分は輪郭式の築城をするに当たり、非常に大規模な土木工事を行った。尾



発掘風景

根の部分进行削り、曲輪周辺を埋め立てて曲輪面積を増加させていることである。遺物に関しては非常に少なく、陶器片数点、土師質土器坏一点、内耳土器破片数点であった。

まとめ……矢嶋城を時代的にいつ頃の城と定義づけることは、現在の調査状況では不可能であるが、強いて述べるならば、南北朝時代に築城し、室町時代には廃城になったものではないかと考察する。その理由は、築城に比較的長い時間と手間をかけたものと推察するが、城の重要地点である虎口（主郭部分）の形状が初期（南北朝～室町初期）の形態でその後城郭の進歩に伴う改築がなされないということからである。

最後に今後の遺跡の展望であるが、今調査では城域約7万m<sup>2</sup>という広域の内、ほんの750m<sup>2</sup>を調査したにすぎず、この城の特異性を考えるに、できれば永久保存の対象とし、時間をかけて全面調査が行われるべき遺跡と考える。

## 山形村殿村遺跡

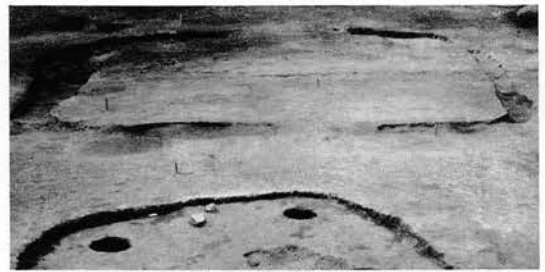
殿村遺跡調査団 青 沼 博 文

昭和55年より行われている竹田地区圃場整備事業も今年度で終了するが、それにともない昨年まで4遺跡の調査を行ってきた。5遺跡目となる殿村遺跡は、遺跡の規模、内容ともに最大であり、多くの成果をあげている。

遺跡は、山形小学校の北約400m、唐沢川が形成した扇状地上にあり、南を三間沢川が東流している。畑地の耕作時、分布調査等により、縄文、平安期の遺物が多数採集されており、かなり大規模な遺跡であると注目されていたが、大部分は水田下であり、水田造作時の削平破壊が懸念されていた。



調査風景



方形周溝墓

調査は8月1日より始まり、現在までに約3000m<sup>2</sup>の範囲の調査を終了した。その結果、縄文時代中期中葉住居址4、同末葉住居址18、方形周溝墓1、終末期古墳1、平安末住居址9、同掘立柱遺構1、同墓壙4、各期土壘50以上と各時代にわたる遺構が検出され、当初の予想をはるかに上まわる成果をあげることができた。縄文・平安期の集落はさらに東から南へ広がることが予見される。

遺物も、縄文時代のものを中心に多量に出土している。胴部穿孔のある埋甕、釣手土器、北陸系色彩の強い土器等々、興味ある土器類とともに、大形黒曜石製石槍、耳栓、土偶など今後の整理作業に期待がもてる。

山形村を代表する大遺跡として三夜塚遺跡があるが、発掘調査もされておらず「幻の遺跡」となっているが、殿村遺跡は、集落の構成をほぼ解明できること、松本平西部地区では初めての発見である方形周溝墓の存在等、貴重な発掘調査となった。遺構の広がりが予想される水田2000m<sup>2</sup>が来年3月に継続調査される予定である。

### 研修内容報告

#### (1) 埋蔵文化財基礎課程

戸倉町教育委員会 大 田 幸 博

当町における文化財保護行政はかなり遅れているが、近隣に埋文保護の先進地があることや、昭和58年度から町誌の編纂事業が始まったことなどにより、文化財保護についての関心が高まってきた。

そんな中で、今年度遺跡詳細分布調査事業を国庫補助で実施することになり、出来上がった分布図をもとに、埋蔵文化財の保護を強化したいと考えている。

それには、文化財事務担当者としての基礎知識が必要であるので、今年度7月5日から11日まで、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターにおいて開催され

た、「埋蔵文化財基礎課程」に参加した。

今年は長野県も暑かったが、やはり本場の暑さはケタ違いで、連日のまわりつくような猛暑の中、この暑さなら大昔から稲は豊作で、この地が発展したわけだ、などと思いながら、無事1週間の研究を修了することができた。研修の日程は下記のとおりである。

1日目	遺跡の保存と活用	田中 琢講師
2日目	飛鳥・藤原宮跡地域遺跡保存整備状況見学	
3日目	遺跡の整備	安原啓示講師
4日目	発掘調査の実際	町田 章講師
	日本考古学の現状と問題点	工楽善通講師
5日目	遺跡の保存と文化財保護法	和田勝彦講師
	埋蔵文化財保護の問題点	一検討会一
6日目	調査方法の進歩とその適用	山本忠尚講師
	諸外国の遺跡保存	佐原 真講師

第1日目、田中埋文センター長の講演の中で、昭和50年に文化財保護法が改正されたが不十分なところが

多く、埋蔵文化財の保護については、行政の考え次第である。というお話があったが、2日目に見学した飛鳥村の遺跡の保存整備状況はすばらしいものであり、観光・環境保全と結びついて理想的なものだと思う。飛鳥村役場の庁舎は石舞台古墳を模倣して建てられたそうだが、文化財への力の入れ方がうかがえる。

最近、県内どここの市町村でも、道路建設や農業基盤整備事業等の土地開発が急増している。それに伴う緊急発掘調査におわれている状態だが、人的、予算的に余裕ができたなら、佐原講師の講演の中にあつたように、集落全体を発掘復元し、当時の生活様式などもうかがえる「歴史公園」のようなものが作れたなら、すばらしいことだと思う。

それから、現在、発掘に際して、発掘担当者が見つからないという、基本的なことで悩んでいる市町村が多いと聞く。各市町村で専門職員を採用して対応していくのが最良だと思うが、事情によりそれが困難な市町村もあるので、県教委、県埋文センターと連絡を密にし、また御協力をお願いして、スムーズな発掘の体制を作れるよう努力したい。

## (2) 石器調査課程

### —石器づくりの方法—

埋文センター調査研究員 関 賢 司

4月26日から3日間、奈良国立文化財研究所の「石器調査課程」の研修に参加することができたので、その報告をしたい。

- 日程 4・26 割れの原理・割れ斜面  
 割り実験の用具、原石の選定、石器用素材剥片取り
- 4・27 東京・前田耕地遺跡の例 宮崎博  
 両面加工石器づくり
- 4・28 実測図・何を描くのか

#### 1 用 具

- ・硬質ハンマー 砂岩円礫 大、小各1個  
 数か所に打点となる凸部をもつ。小は手のひらに握れる程度の大きさ。
- ・軟質ハンマー 鹿角。大一幹の部分、小一枝の部分。空洞部分が少なく、堅いもの。
- ・防護用皮 牛皮。膝当て用の大きいものと手のひらをおおう小さいもの各1枚。

## 2 石 材

黒曜石とサヌカイトの2種類を用いた。

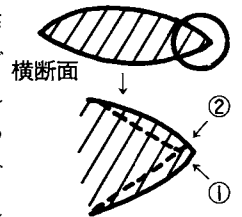
## 3 石器づくり

①剥片剥離(尖頭器)はじめに硬質ハンマーの大きを使い、原石から板状の剥片をはぎ取る。打面には石の二面が構成する角が鋭角の部分を選ぶとより割り易い。もしこの角度が鈍角の場合は、角度が大きい程打面を傾けなければ石は割れてこない。また、二度、三度と数多くたたけばたたく程石の内部に力が蓄積され、いくつ割れたとしてもこなごなになってしまう。従って、剥片剥離はできれば一回の打撃で行うことが望ましい。

②整形 次に硬質ハンマーの小や、鹿角の大きを使って石器のだいたいの形を作る。原石から剥ぎ取った剥片は、ももの上などに置いて片方の手で押さえながらたたいていく。この時、加える力はほんのわずかでよい。あまり力まかせにたたくと、きれいな(薄くて長い)剥片が取れないばかりか、黒曜石などではすぐにバラバラになってしまう。

③打面調整 ある程度石器の形に近づいてくると、打面調整が必要になってくる。これは、打面と打面に隣り合う面との角度を打撃に先立って大きくしておく方法である(図)。こうすると、たとえば深くて短い刻離であるステップ(階段状)などの好ましくない割れ方を防いで、薄くて長い剥片を取ることができる。なお、この段階では鹿角の小を使った。また尖頭器の完成のために押圧剥離を加えることはしなかった。

④押圧剥離(石鏃)石鏃の素材には、尖頭器を作る途中でできた薄身の剥片を使った。これは次の整形作業を楽にするためである。整形作業は鹿角の小で石鏃のおよその形を作る。それができたら次に鹿角の小の尖った部分で細部加工(押圧剥離)を行う。これは、掌を皮で防護しておいてそこに整形した材料をもち、鹿角の先端を材料の側縁にあて、強く圧迫を加えて押しはぐものである。石鏃基部の<sup>くぼ</sup>りもこの方法で作ることができた。



以上が実習の内容であるが、今まで述べた方法はあくまでも製作実験における方法であり、実際の石器がそれらの方法で作られたものであるとは必ずしも言えない。また、石器の製作方法にはこのほかにも多くの方法が考えられており、今回はその一つを試みたにすぎない。

## 埋文施設紹介(9)



小諸市立火山博物館

〔建物の概要〕 周知のとおり、浅間山は地形・地質構造・火山活動・火山形態など各面の地球物理学的研究が古くから行われており、その成果は、日本の火山学・地震学を進歩させる原動力となってきた。当館はこうした特性を生かして、今後とも斯学研究に貢献したいとの念願から、昭和43年に設立された。敷地面積約25000m<sup>2</sup>、建物総面積662m<sup>2</sup>の鉄筋コンクリート2階建ての本棟1・2階には、展示室・陳列室(419m<sup>2</sup>)を設け収蔵庫(20m<sup>2</sup>)を従属させている。別棟(42m<sup>2</sup>)は研究室に活用している。

〔展示〕 本棟1・2階の展示は、浅間山及びその周辺の地形・地質はもとより、そこに生育する動植物や人間生活が把握されるように配置されている。

1階では、浅間山の生成・地質構造・現在までの火山活動について、パノラマや写真パネルから立体的に学ぶことができる。火山活動と密接な関わりをもつ地震についても、レリーフ等を用いて汎世界的な視野から浅間山を位置づけ説明している。また、現在の浅間山火山研究に不可欠の、天明3年浅間山大噴火に関する古記録も見逃せない。



小諸市の発掘調査報告書

浅間山周辺に生息する動植物の様子は、2階展示室で窺うことができる。115科約1100種の植物については、標高差による植生の変化が理解されるよう図示されている。いっぽう岩石中に含まれる化石からは、浅間山の火山活動開始以前の自然環境が復原でき、興味深い。

こうした周囲の環境と、常に関わりをもちながら暮らしてきた人々の生活については、先土器時代から中世にわたる考古資料が物語ってくれる。縄文時代中・後期の敷石住居址を検出し

た郷土遺跡・石神遺跡の遺物は、本県にあって比較的資料が少ない時期だけに貴重である。特に郷土遺跡は、学史の上でも古くから調査されており、現在市史跡に指定されている。縄文時代晩期の様子を知るには、氷遺跡の遺物を欠くことはできない。僅か17m<sup>2</sup>の小発掘とはいえ、得られた資料は土器・石器・土製品等莫大な数にのぼる。弥生時代後期や古墳時代のもとして、五ヶ城遺跡や加増4号古墳の資料がある。集落遺跡の遺物と合わせて、古墳出土の埴輪なども格好の研究材料となろう。奈良から平安時代では宮ノ反、関口B遺跡がある。いずれも近年調査されたもので、今後さらに分析が必要とされる。

〔特別展・行事〕 毎年8月、夏季特別展が無休で開催されている。昨年の「浅間山の野鳥」に続き、今年は「佐久の蝶」と題して行われた。埋蔵文化財関係では、昭和55年「掘り出された古代の小諸」をテーマに実施され好評を博している。その他、春から夏にかけて、野鳥に親しむ会や野草に親しむ会が小諸周辺及び蓼科山など遠隔地で行われた。今年11月には、市内の小中学生を対象にした「星を見る会」の開催を予定している。

〔文献等〕 小諸市誌「歴史篇一」(2500円)同「歴史篇二」(3000円)、火山資料(250円)

所在地 〒384 小諸市丁221 (02672-2-0913)  
 休館日 4月～10月無休 11～3月毎水曜日 年末年始  
 入館料 一般大人200円 小人(小中学生)100円 団体(30名以上)大人150円 小人70円  
 交通 小諸駅下車徒歩15分

## —中央道長野線調査状況—

**中島A・B遺跡** 3か年にわたる両遺跡の調査は、多大な成果をあげて、8月10日に終了した。詳細は前号で紹介したとおりである。その後、アメリカの懶テレダインに依頼した放射性炭素年代測定の結果がでた。

GNJ(A)LD-23 中島A遺跡IVb層 2840±90

GNJ(B)IVA-720 中島B遺跡VIa層 12460±310  
ちなみに、中島A遺跡IVb層からは縄文晩期土器が、中島B遺跡VIa層では隆起線土器が出土している。

**膳棚B(白山)遺跡** 本遺跡は、岡谷市の北西、塩嶺山塊にある東側に突出したやせ尾根の一つに位置する。対象面積1280m<sup>2</sup>を、8月下旬から10月上旬にかけて調査した。その結果、縄文中期初頭の住居址1軒、土壙9基、奈良時代と推定される石組み墓1基が検出された。住居址は、尾根頂上部よりやや東側に位置し、径3m弱のほぼ円形を呈する小型のものである。内部施設として北西壁に三角状の輝石安山岩平石による立石がみられた。立石を伴う住居としては最古の部類に属するのではないだろうか。一方、石組み墓は尾根の南斜面中腹に存する。人頭大の石を組み合わせており、底石、天井石も確認された。内部から、人骨片が採集されたものの、副葬品は全くみられなかった。なお、付近の下り林・西林・大洞・大久保遺跡と共に、遺跡の立地環境を一考するためにも、本遺跡は良好な資料を呈示したといえよう。



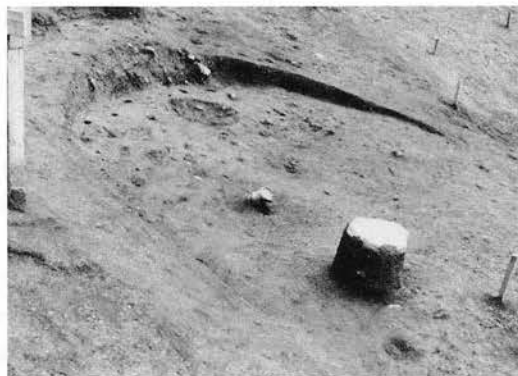
石組み墓(奈良時代)

**大洞遺跡** 本遺跡は岡谷市神明町にあり、塩嶺山地の山麓部に位置している。遺跡は摺り鉢状の地形の底部と斜面部に立地し、4月下旬から9月中旬にかけて調査を行った。その結果、南面する急斜面を中心に縄文前期末から中期初頭の住居址3軒、同時期の土壙12基、集石炉5基、黒曜石のデポ9か所、平安時代と考

えられる石囲墓1基、焼土3か所を検出し、それに伴う多量の遺物を得た。

3軒の住居址はいずれも斜面上に構築されていた。3号住居址は斜面を平坦面にするため厚く埋土してあり、その厚さが30~40cmほどあることを確認し、斜面における家の構築法を考える上で好材料となるものである。5基の集石炉はいずれも拳大から人頭大よりやや小さな石がぎっしりと入り、底には摺り鉢状に敷石が施してある。敷石の直上には木炭・焼土があり、用法を考える上で一つの示唆を与えてくれそうである。9か所の黒曜石のデポや多くの黒曜石原石が検出されており、峠にかかる麓の遺跡という立地から興味ある事実である。

一方、近接する白山・西林遺跡からも同期の遺構・遺物が検出されており、塩嶺山地山麓部一帯の遺跡群としての把握が検討される。



斜面に構築された第2号住居址

**青木沢東遺跡** 塩尻側トンネル出口に近く、今年度に入り塩尻市教育委員会の届出により調査対象に加えられた遺跡である。事前の表採では弥生土器などがみられ期待されたが、僅かに土師器の出土をみに留まった。

**八窪遺跡** 本遺跡は、塩尻市柿沢地籍にあり、みどり湖の東200m、西流する田川によって開折された谷の南斜面に立地している。

調査の結果、縄文早期の住居址2軒、平安時代の住居址1軒、土壙18基、時期不明の長方形をした竪穴遺構2基、集石遺構1基等が検出された。遺物は、これらに伴うもののほか、古墳時代の須恵器・土師器も出土している。縄文早期の住居址は、いずれも尾根上部で検出された。第2号住居址は6×5mの不整階円形を呈し、住居内中心南側にわずかな焼土と、南から西へかけての壁で3本の柱穴を確認した。第3号住居址は、7×7mのほぼ円形を呈している。両住居址ともに、覆土中より押型文土器・石鏃、磨石が出土してい

る。押型文土器を伴う住居として好資料になると思われる。

以上本遺跡の概況を述べてきたが、山間部における縄文早期から平安時代の複合遺跡として、他遺跡との関連を今後検討課題としたい。

**大原遺跡** 東山麓に源を発する四沢川によって形成された西向傾斜の広大な扇状地上に遺跡は立地している。中央道は遺跡の中央を南北に横断する。

大原遺跡は、以前より縄文土器を出土することで知られており、今回の調査には集落発見の期待がかけられていた。しかし、実際に調査してみるとかなりの面積は開墾や圃場整備等によってローム（二次堆積）まで深耕されていて、埋土部分の下から底が長方形のおとし穴と思われるもの3基を含め計8基の土壌が検出されただけであった。遺物は、縄文前期・中期・後期の土器、石器、土師器、須恵器などで、量は少ない。

**高山（城跡）遺跡** 本遺跡は、高ボッチ山塊の西山麓が松本盆地南東縁に接する塩尻市長畝地籍にある。

調査は9月上旬より約3週間程行った。当初、地形景観から推して城跡の可能性が指摘されたが、これに関する遺構・遺物は皆無であった。一方、わずかながら、縄文早期末～中期初頭の土器片や石鏃・打製石斧等が出土し、土壌2基が検出された。

**吉田川西遺跡** 遺跡は、中央自動車道長野線塩尻北インターチェンジ予定地の東側の本線部分で、奈良井川の段丘面から沖積面に移行する地形に立地する。調査は昭和59年8月1日より11月30日まで行った。遺構としては、平安時代の住居址20、土壌10、柱穴多数が検出された。遺物から時期を考えると、須恵器が供膳形態の大部分を占める時期から、灰釉陶器や中世の土師質土器に近い土器を伴う時期までみられる。この中で特異な出土状態で注目されるのは第5号住居址（SB-5）である。土師器の杯約50点、灰釉陶器の碗と



第5号住居址遺物出土状態

皿が、住居址の隅に灰層をはさんで床面より若干浮いた状態で、まとまって出土した。土器は重ねられたままの状態で出土したものが何点かみられる。

以上のように平安時代の遺構が大部分であるが、遺跡の中心部分は来年度の調査の予定である。なお、もう一点注目されることは、中世から近世にかけての遺物（青磁、白磁、陶器、内耳土器など）が多数出土していることである。

来年度の調査が期待される。

**神戸遺跡** 松本市笹賀神戸一帯に所在し、松本市内で中央道用地内の遺跡発掘は初めてである。本遺跡の調査対象面積は40,400m<sup>2</sup>である。本年度は、10月22日より調査を開始した。調査は地形形成過程・遺物包含層のあり方を明らかにすべくトレンチ発掘を行っている。また、古字・伝承の聞き込みによって歴史的環境を知ろうとしている。

現在、南端のトレンチ発掘を行っており、小礫のジャリ層から須恵器・土師器の破片を検出した。この中には、須恵器の小壺の完形品が出土している。しかし、これらの遺物は移動したものであり、その供給源となる包含層、遺構の検出はない。

### 埋文センター日誌（8月～11月）

8月29日 岡谷塩尻松本豊科の市長町長中央道工事状況視察で大原遺跡来訪。  
9月2日 国学院大学上代純一先生高山遺跡踏査指導。  
13日 岡谷市長原遺跡立会調査（県文化課、岡谷市、埋文センター）包蔵地でないこと確認。  
21日 中央道用地松本市内遺跡踏査。  
27日 全埋文法人連絡協議会研修会（栃木）。  
10月8日 膳棚B（白山）遺跡の発掘調査終了により岡谷市の発掘調査全部完了。  
19日 全埋文法人連協関東中部協議会（群馬）。

22日 中央道松本市内神戸遺跡の発掘調査開始。  
11月10日 長門町鷹山遺跡土層剥取り技術指導に小林至・原明芳調査研究員派遣。  
12日 中島豊志先生による木材鑑定と指導。  
14日 太田守夫先生による神戸・吉田川西遺跡の地質地形の指導。  
21日 関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者会議（山梨）。  
30日 中央道長野岡谷地区出土品展（11月30日～12月2日、市立岡谷美術考古館、入場者1,112人）。